



古今物語乃説

79
622



類聚國史卷第卅三云
弘仁六年六月壬寅令
畿内並近江丹波播磨
等國殖茶每年獻之

永忠大僧都つづ茶を煮て茶
まじりにみつどまままをつくくようく
を勢勢勢ひひてかづけめめたまづづりりをらや
てそのこのふ月ふ己乃内内津津國ををてり
多く近近江江丹丹波波播播磨磨のの國をり
地地下下せせて國もも茶茶ををり急めめて
ととぐぐれれ剪剪めめににささだだめめりりののよ
—きももあありりがが法法國のよよくくははり
用用るるここととちちににははたたののよよくくははり
世世ににままづづここのの後後引引出出ては時時ををりり

元亨釋書卷十六云釋
永忠京兆人姓秋篠氏
寶龜之初入唐留學延
曆之季隨使歸
日本記畧云弘仁七年
夏四月庚子是日大僧
都永忠平年七十四

ととめめとといいひひ傳傳ふふめめををけけるるをを思思ふふ
かの僧都をよよいいわわるるややどどようよう物
ままひひふふかかのの國をりりたたりりゆゆりりととりりと
ふふああゆゆるるのの春春秋秋をを経経てて近近唐唐ののよよくく
つつととわわののみみかかののゆゆりりままううででらら耕耕
かかばばをを時時ににやや此此種種ををももをを傳傳つつくく植
たた同同一一法法ををいいととああむむじじににたたままににああららむむ
ややかかははおおももひひまままま—をりりてて耕耕つつたたもも
くくそそののままももうう急急たたりりととりりたたりりととりりと
そそのの—はりりののままはは—をりりてて耕耕つつたたもも

東坡志林の此事をいひ
 て薛能の詩に鹽漬添
 常戒並宜煮更誇とい
 ふ侍を引つたうも彼
 田氏家集卷下乞滋十
 三摘茶詩云不勞外出
 好居家大抵閑人只愛
 茶見我銚中魚失眠聞
 君園裏茗為茶詩行許
 摘何妨决使及盈筐可
 得誇庭樹近來春欲暮
 莫教空腹猶看花

真俗交談記云延喜二
 年醍醐天皇仁和寺朝
 觀行幸御時法皇御對
 面後茶二盞有御勸和

琴一張為御引出物令
 進之給
 花多餘情以茶云字多
 の法一由公前けち正
 月二日初觀行幸のた
 め延喜乃か仁和寺
 一引きあり時法皇靴
 を徹せられて又手三
 杯一飲一又言よしも
 法皇も同法皇を侍
 せしゆもあち内法祥
 乃附の儀のありしに
 信の附礼のありしに
 のこあるなり

てついでに人母の神が園の中にとまきこ
 う急おきるとおきよふいふもまきこえ
 仁和の法はたあていさるみや人のあか
 せふそのふとめさたりいさねあや
 しみたふぬまふいまぶたぶてのあき
 あつひいざあふたあてたがかう
 ふんおきこひつこむる法はあや
 のあまふらぶらぶらたあていさ
 年一延喜二年正月のゆかどに
 如寺に法皇はあやまふいさ
 五

ま一対はたいめれらあまふいさ
 りあやあやあやあやあやあやあや
 はあやあやあやあやあやあやあや
 の法はあやあやあやあやあやあや
 きあやあやあやあやあやあやあや
 りあやあやあやあやあやあやあや
 たあやあやあやあやあやあやあや
 やあやあやあやあやあやあやあや
 りあやあやあやあやあやあやあや
 一あやあやあやあやあやあやあや

新儀式上卷 天皇奉
 賀上皇御筭事云供御
 膳臺盤二脚次供御酒
 延喜十六年法皇供御
 茶也又次召加親王大
 臣參上候簀子敷延喜
 十六年供御膳次召大
 臣并僧正聖寶濟世親
 王令候賜膳賜茶次日
 上皇之親王等
 菅家文草卷四八月十
 五日夜思舊有感詩云

その出居のさしどし進んでくるかろし
 まづに社をすすむるつたづのふ
 らひに成ぬるかろしすし婦
 思ふまゝぬどろぬるふ少るぬづ
 子やあににひの傳ははるるあはれ
 一に十六年に法皇れ法皇たまを
 孫つるももたまをて用ひて成るに
 小の屋られりし新儀式よるる
 菅家の贈古政大臣乃若葉のかりげ
 き酒の飲酒を免ぶる作を經り

茗葉香湯免飲酒蓮華
 妙法授吟詩

書懷詩云東方明未
 睡悶飲一杯茶後集
 兩夜詩云起飲茶一
 坑飲了未消磨
 都氏文集鈔子迴文銘
 多者茶茗飲來如何和
 調體內散悶除病本朝
 文粹卷十の載あり
 延喜式卷廿三民部式
 云年料雜器尾張國瓷
 器大椀五合徑各九寸
 五分中椀五合徑各七
 寸茶小椀徑各六寸椀
 廿口徑各五寸長門國瓷
 器大椀五合徑同上中椀
 十口徑同上小椀十五口徑
 同上茶椀廿口徑同上
 右兩國所進年料雜器

しそひもきこるるるむり
 おさる都言香茶を若葉のひさげの
 銀はるるさるの民部式に年料乃雜
 物の中尾張國長門國の茶椀廿口
 五合径九寸五分中椀五合径七寸
 茶小椀径六寸椀廿口径五寸長門國
 器大椀五合径同上中椀十口径同上
 小椀十五口径同上茶椀廿口径同上
 右兩國所進年料雜器

件茶於大極殿修時亦
 同但茶用器等所例也
 見藏人式
 河海抄於陸奥重信後
 八喜村内重信と大取
 茶種を陸奥と云ふ事
 已引茶とて作茶と云
 加てたり中宮春と云
 神事なり
 海人陸奥中云茶者
 自上古我朝ニテリ挽茶
 希會トテ於内裏祇行
 公事儀式於葉上係入
 唐の時重信茶種ヲ被
 渡梅尾所書上人概言サ
 レハ本々茶トハ梅尾所
 耶ト云流ホノ事ナリ

一、ふらふらにからりずとて福のやかく
 のさだめぬも思ふぬに成すもあは
 ぬハハの喜秋の地徳種よ此記茶とて
 まふ式をなほそとてたててわらむ
 世よゆひぬらりてわらむ一更よ
 さもゆきあも中へはすづか中はの
 共したるもあつてはわらむあつて
 かくむ人すくれぬちうもてあつてあ
 かりすもぬらりてあつてあつてあ
 ありてあつてあつてあつてあつてあ

自有昌明煙液塵細雲
 兼沐生煎来虎眼慰旅
 人情散悶之計乃功不
 輕
 五海安元二年三月

ふらふらにからりてあつてあつてあ
 わらむもあつてあつてあつてあ
 法皇の御中より法皇を因りてあつてあ
 新ひて時康和の地徳種よ此記茶とて
 て法茶とてあつてあつてあつてあ
 右の地徳種よ此記茶とてあつてあ
 さいふの地徳種よ此記茶とてあつてあ
 なるもあつてあつてあつてあつてあ
 ありてあつてあつてあつてあつてあ
 後乃法皇の御中より法皇を因りてあ

後門不見梅及木名入
 其壹法以進之惟一條
 祿園の作はしり尺素性
 來云斯院甚暖筆可至
 若芽既萌復南水之本
 所宜可多遊山作亦宜
 治者當代を來之清美
 貌梅尾考此間臨表嶽
 之禪院名不意之後
 云不枝思合三考亦先
 枝考指史於二才新院
 不晚之左右可枝定法
 出之茶後軟隨命壹壹
 二今進之惟新日深淵
 之是梅之苗一葉之枝
 細之惟又西江産入ホ
 却今之今後開加井送
 外如小島茶園ホ之名
 苑ホ茶園茶種純採合
 之下至一葉茶之被収

名たる園はついで係をそやくより本の
 茶といひてそのあらはれより出くる枝を
 此の茶とよびてそやしくまの園の
 了ふまのいふまのほまのちのち
 て時のちおほまのいかりまのい
 梅尾の字治のいふまのい
 中たのいそまのいそまのい
 ふのいまのいそまのい
 いまのいまのいそまのい
 宗易は傳へてはひよとのせむ武のい

沙門蘭叔述酒茶論云
 西齋詩話云壽上人回
 自日本以其國所産梅
 尾山茶見惠賦詩謝之
 其畧云幸得梅山信初
 嘗日本茶本朝梅尾山
 為第一宇治次之梅與
 梅相似故通而用近代
 好茶者以宇治為第一
 梅尾山次之有宇治茶
 之別稱曰無上曰別義
 曰極無

少を福りまのいそまのい
 のあまの世にあらはれよとのい
 らのい人のいそまのい
 ちのい人のいそまのい
 たのい人のいそまのい
 まのい人のいそまのい
 らのい人のいそまのい
 のい人のいそまのい
 のい人のいそまのい
 のい人のいそまのい

Handwritten text in cursive script, likely a list or account. The text is written on a single page and is somewhat faded. The words are difficult to decipher but appear to be organized into several lines. The text is written in a cursive style that is characteristic of the 17th or 18th century.

Handwritten text in cursive script, likely a list or account. The text is written on a single page and is somewhat faded. The words are difficult to decipher but appear to be organized into several lines. The text is written in a cursive style that is characteristic of the 17th or 18th century.

山城國菟道
御物茶製所
上林家藏刻

鶯園先生著述書目

萬葉集私記

初帙五冊

風土記逸文攷證

全六冊

語例

發語例 音通例 延語例 約語例 轉約
助語例 畧語例 體用例 雜例

全二冊

古事記歌注

內山真龍大人考注
前田夏蔭大人校補

全二冊

本朝儒官沿革考

全一冊

源氏物語考文

古集刊誤

子世能ふゆみち

全一冊

いふより昔よりとていふ事ありしは皇國の學法をわたりてこれ來りしものなり
多歳の學者も堪能の教他もいふより一書よりありし教を誤多しなり
中比の學者も同じしにして後世の法絶しより我國の法を確する法をいふ
皇國の學者も時取より一書を失つてとて成事し小正百年よりなり
さるる古學よりいひてけりて皇國の學者も世より無き事
にさるるその變革をわたりて考れし今皇國の書を讀む者も
を本とせし皇國の大學をいふる海學者もいふるこれを要するなり
以垂流せしむる

北海大志を理

全二冊

古今集序をとりて公侯卿の形撰髓九品のより送濟十神其後悦目抄たり
より下流家の體經數十神の中よりいふより一書よりありし教を誤多しなり
欽金の判詞をとりてより一書を引用し皇國の教のより一國教の論の法家
評者海寇の教より一書を引用して皇國の教のより一國教の論の法家
中比のすしれりる人の教の古今に通してほい用ひし書を今もて採り
集りてきたる皇國の準則とありしなり

未オク

鷺島園叢考

初帙三冊

題詠選

全六冊

文政十二年歲次己丑十月發行

江戸下谷池之端仲町

製本所

尚友堂岡村庄助

白三斗
藥菜科
今斗

藥本原
藥方書
文苑十二卷
題名表
明倫彙編



